



岡田 誠さん(高瀬)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：11月3日

浪江の町の思い出は？ 「いろいろなものが結構揃っていて、 便利で住み易く、楽しい町でしたよ」

冬でも暖かないわき市に越されてから、まもなく1年。
誠さんは今年4月に発足した全日本歌謡研究会福島地区の副理事長を務めておられます。
カラオケの盛んないわきで、趣味を通じて新たな繋がりが生まれていらっしゃるようです。
また、奥様のトミエさんは、東京に避難していた際に習った日本舞踊を今も続けておられ、
いわきに移られた後も活発に活動されています。



▲岡田誠さん、トミエさんご夫妻

◆あの日、あの時、どうされてい
ましたか
浪江町のシンボルと言われた
「サンブラザ」で、食料品のスー
パー「サンフーズ」を営んでいま
した。私は外出中で、店に戻る直
前に地震が発生しました。お客さ
まも従業員も店内はパニック状態
でした。当日は、家族や家のこと
が心配だろうと思い、従業員全員
を直ぐに帰宅させました。帰宅途
中に津波に巻き込まれ、1人死亡
なりました。とても残念です。
翌日、お客さまはもちろん、役
場からも物資の問い合わせが多数
あり、小高店の店頭でテントを張
り、幹部総出で販売をしました。
母が福島医大に入院していて、
数日前に手術を終え、妻はまたま
大地震の前日、身の回りの物を取
りに浪江の家に帰宅してしまし

た。翌日、私は早朝から店に行き
家に戻れなかったため、午後2時
過ぎに妻は避難のために津島へ向
おうとしたが、連なった車の
列に入らずに、相馬市に住む妹を
頼り、私も夕方、そこに合流しま
した。
相馬に2晩お世話になった後、
母のことが心配で医大に向かいま
したが、院内に入ることができま
せんでした。スクリーニング検査
の厳重な確認はもちろん、家族や
親戚の安否などを書いた直筆のメ
モさえ渡せず、職員の方が書き写
したメモを母に届けてもらいまし
た。その後も三春の私の実家に世
話になりながら足を運んだのです
が、とうとう面会は叶いませんで
した。電話も繋がらず、さぞ不安
な日々を過ごしたのではないかと
思います。
その後、千葉県津田沼に在る長
男のところを経て、東京都江東区
の東雲住宅に入居しました。
母を医大から東京の病院へ移
し、暫くは通院していたのです
が、再び7月に入院。8月に亡く
なりました。東京に行く時に、「長
年住み慣れた浪江の家を見たい」
と言っていました。立入り禁止
区域となっていたために、見るこ
となく逝ったことが心残りです。
◆いわきの暮らしはどつですか。
また、浪江に対する思いも聞か
せてください
東京はとても便利で、東雲住宅
の方々とも交流を育み、昨年12月

まで過ごしました。私たちには3
人の息子がおり、千葉と県内にそ
れぞれ暮らしています。子どもた
ちや孫が来てくれる家をと、郡山
市やいわき市を見て回りました。
そして、東京から通いながら3年
越しで、この家を建てることので
きました。
私たちが住んでいた家をどうす
るか、今もなかなか踏ん切りがつか
ませんが、町の復興の道筋が見
えてくると、判断も楽になるかも
しれませんね。
いわきの同じ住宅地内には、
偶然にも大変親しくしていた地
区の方がいらして、とても心強
いです。近所の方々とも触れ合い
ながら暮らしていきたいと思っ
ています。
商売や商工会の活動でお世話に
なった浪江町への思いは終生変わ
ることはありません。ですから、
これからは何かで関わっていきたく
い、繋がりを失くしたくないと思
っています。



▲トミエさんのお父さまは庭の手入れが
ご趣味で、庭石の蒐集もなさっていた
そうです。浪江から運ばれた庭石のひ
とつの前で、もうワンカット

浪江の こころ通信

・第67号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、
そして福島第一原子力発電所の事故により、福島
県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難
生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんが
どのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱
いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江の
こころプロジェクト”が立ち上げられました。
一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)
が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さん
が取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江の
こころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難してい
る町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通
してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らし
を取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有
しようとするものです。

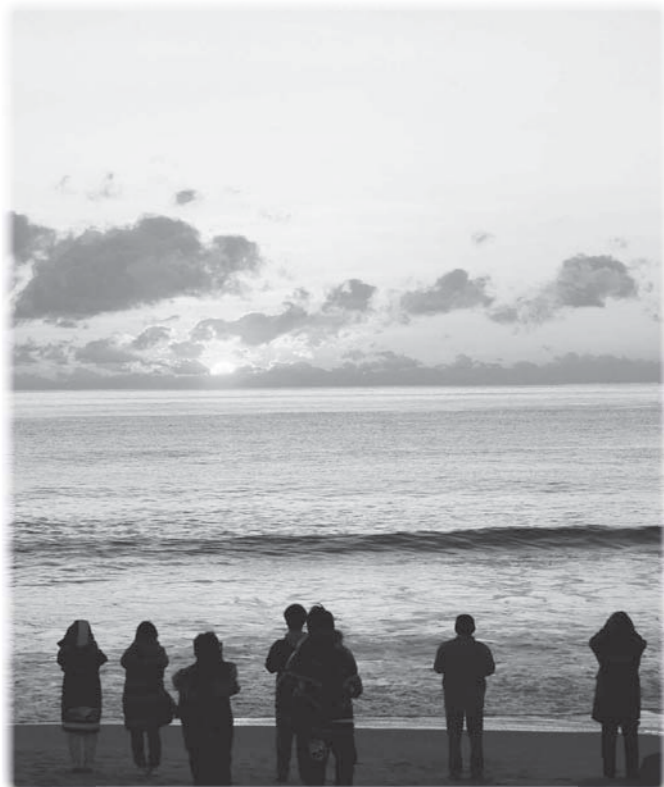
※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、
東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働の
まちづくりの推進を目的として、大学、NPO、
企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ
支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さん
に、再度の取材を行うコーナーです。
3・11から5年以上が経過した今、感
じていること、伝えたいこと、そして最初
の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの
思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第67号」への 感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





堀川 文夫さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：11月4日

浪江で長年積み重ねた経験と信頼。 新たな土地でそれを取り戻すことはもうできない。 自分が今できることを、毎日精一杯取り組むだけです。

堀川さんご夫妻は、震災後避難した静岡県富士市で学習塾を営まれている。塾生へのかかわり方、趣味の社交ダンスや釣りなど、表向きは浪江の時と変わらぬ仕事ぶりや活動ではあっても、思ったようにはならないもどかしさや苦悩が見える。

しかし4年半ぶりの再取材だったが、まちの復興や教育に対する堀川さんの熱い思いは以前のように力強く伝わってきた。



▲左から妻の貴子さんと文夫さん。学習塾を兼ねた自宅前で。

震災直後、富士市に避難して最初の10か月間過ごした住まいから、現在のところに移り住んで4年以上が経過しました。ここは持ち家ですが、今もなお「避難中」であるという感覚は変わりません。落ち着かない気持ちです。でも先のことを描いてもどうにもならないので、まずは5年先のことを考えようと思進んだつもりでしたが、もうその5年が経ってしまいましたね。また次の5年を考えなければなら

りません。安心して落ち着ける時間は本当にいつ来るのでしょうか。ここにきてから浪江のときのように学習塾を始めました。ようやく20名ほどの塾生が通ってくれるようになりました。震災当時、浪江で塾生だった教え子たちとは毎年交流があります。先日は、こちらの塾生たちの林間学校の応援のために遠方から集まってくれました。心からうれしかったですね。最近、浪江での塾生たちとの思い出をビデオにまとめて妻とふり返っています。当時は60名を越える塾生がいました。浪江町で二十数年をかけて積み上げてきた経験や地域の皆さんとの信頼関係は、今となっては本当に尊いものです。土地が変われば、学校や親たちの考え方も、子どもたちの教育環境もかなり違います。そして私たちの年齢のこともありますから、浪江と同じだけのものを取り戻すことはもうできないと思っています。それでも、浪江の頃と同じように趣味の社交ダンスや釣りを楽しみながら、今の自分ができることに取り組んでいます。

こちらでは震災や原発事故の教訓を伝える語り部としての活動も時折あります。本気で受け止めてもらうためには根気強さが必要ですが、何度でも子どもたちには伝えていくつもりです。最近の福島の報道などを見ると、地震や津波、原発や放射能の危険性をきちんと子どもたちに伝えていくのかどうか疑問を感じるときがあります。あの震災の教訓をしっかりと次の世代に語り伝える責任が私たちにあり、強く思うのです。いよいよ帰郷の話が始まっていますね。私は、浪江町の復興が一つの方向だけを向いていた、一つの価値観に偏っていたりすることを危惧しています。私にも自分なりの考えはありますが、特に福島ではなかなかそのことを口にできない雰囲気があります。そのためか、ふり返ると身のほどに合った取り組みだけをしてきた自分にも気づきます。そんな自分もどかしいです。ただ、全国に散り散りになった町民の皆さんの思いが本心に多様なものであることはきちんと受け止めてほしいと願っています。



今泉保奈美さん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：10月22日

浪江のまちづくりに関わるのが夢です



▲ご自宅の玄関先で、バットの構えを見せてくれる保奈美さん

今泉保奈美さんは現在、大学1年生。葛尾村を経て福島市内で避難生活を送り、現在は飯坂町に新築したご自宅でご家族とともに元気に暮らしています。

小学校時代から続けている野球に夢中。大学で学んでいる土木建築の知識を生かし、「将来は浪江のまちづくりに役立てたら」と力強い言葉を聞かせてくれました。

◆今、夢中になっていること
野球です。福島県内で唯一の女子硬式野球チーム、郡山市の「福島ウィーナスベースボールクラブ」に所属しています。中学生から社会人まで年齢を問わず、多世代の人と交流できるのも楽しいです。ポジションはセカンドですが、人数が少ないので内野も外野もできるようなしておいてねと言われるように自分としては守りより打つほうが楽しいですね。
毎週土日が練習日。郡山まで電車で通うのは結構大変です。練習場も毎回変わるの、母の車で送ってもらうこともありません。また関東リーグに入っているの、大会が開かれる日は朝5時頃、父たちが運転するワゴン車にみんなで乗り合って関東

圏に出発し、夜10時くらいに帰ってきます。親にも負担をかけていますが、「応援するのが楽しい。張り合いがある」と言ってくれるのはありがたいです。今秋のシーズン中で一番思い出深いのは、ヤングという男子チームが主催する大会に呼んでいただいた、新潟の男子チームに勝ったこと。最後に自分が打って点が入った時には本当に嬉しかったです。

◆将来の夢、故郷への思い
大学では土木系の勉強をしています。祖父が木工で、今、住んでいる家も祖父が建ててくれたんです。私も子どもの頃から大工仕事が好きで、デザイン・設計よりも体を動かして物づくりをするほうが性に合っている。それで土木系を選びました。
将来的には大学での学びを活かして、浪江のまちづくりに関わるのが夢です。実現できるかどうかかわからないけれど、例えば道路をきれいにするとか、復興に少しでも貢献できたらいいなと思います。
浪江には、15歳になってから年に10回くらい通っています。家はもう住めない状態なので解体が決まっていますが、いつか祖父と力を合わせて新築したい。西信中の友だちとは今もよく一緒に遊んだりしていますが、浪江中の仲間と集まる機会はなかなかなくて。だから成人式でみんなに会えるのをとても楽しみにしています。復興が進み、浪江の体育館で再会することができたら最高ですね。